

---

# 曹徳の奮闘記

零戦

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

曹徳の奮闘記

### 【Nコード】

N2622Z

### 【作者名】

零戦

### 【あらすじ】

乗用車にひき逃げをされて気がつけば、真・恋姫十無双の曹操の弟として生を受けて、イジメられながら育つが遂に家出をした。

真・恋姫十無双（改）の改訂版になります。

別枠で投稿した方がいいと言われたので、新たに新規投稿をします。

テイルズキャラも出します。

## 第一話

「曹徳、その部屋を掃除しときなさい」

「……………はい」

母親の曹嵩に汚物を見るような目で見られながら俺はグチャグチャになった宴会後の部屋を掃除していく。

「……………あら？曹徳はまた掃除なのかしら？よつぱら掃除が好きなのね」

掃除をしていると貧乳のクルクルドリルが特徴の曹操とお供の夏侯惇と夏侯淵がやってきた。

「……………それが仕事なのですよ」

「あらそう。ならついでに厠も掃除しといてね」

曹操は興味なさそうに言い、夏侯惇も先程の曹嵩同様に汚物を見るような目で俺を見て、二人は何処かに行く。

唯一、夏侯淵は申し訳なさそうに俺に頭を下げて部屋を出た。

「……………さて、片付けるか」

俺は皿などの片付けにかかる。

そろそろ俺の自己紹介をするか。

俺の名は曹徳で親は曹嵩、姉は曹操や。

え？頭を打ったて？いやこれが冗談とちゃうねんな。

俺は平凡なサラリーマンやった。（ただし、予備自衛官でもある）

そんなある日、仕事が終わって帰宅途中に乗用車に引かれてんな。

そして気がつけば、昔の中国ぽい家において姿は赤ん坊やった。

そして母親が曹嵩と知った時は驚いたな。

歴史は好きやったから三国志もある程度は知っていた。（横山三  
国志やけど……）

でも、もっと驚いたんが姉が真・恋姫の曹操やった事やな。

ただし、義姉らしい。

俺も詳しい事は分からんからな。俺は捨て子でそれを曹嵩が拾ったとか使用人達が話しているのを盗み聞きして得た情報やし。

曹操は正に天才で、十年の一人の逸材らしい。

対する俺は、平凡な大学を出たサラリーマンやったので、知能は

普通。

曹操同様に期待していた曹嵩は俺に落胆して、教育の全てを曹操に注がせて俺は雑用の仕事ばかりさせってきた。

「……こんなもんやな……」

俺は綺麗にした部屋にふっと息を吐く。

さて、部屋に帰って読書するか。

俺の部屋は厠の近くにある物置に近い部屋だった。

「……………」

俺が読んでいるのは薬草の本やな。

何でそんな本を読んでいるのかというと、もうすぐこの家を出るからやな。

このまま家においたら近いうちに俺は死ぬわ。全身痣だらけやしね。

そのために、野宿する際に食べれるきのみや薬草を勉強してんねんな。

え？盗賊に襲われる？

まあそうやるな。でも先日、武器庫の片隅に何故かこの時代には無いはずの日本刀があつてんな。

しかも二本あつて、うち一本は何でか小太刀やし。一応、予備自衛官をやっていたからある程度は戦える。

路銀もかなり貯めている。

「ま、それより今は勉強やな……………」

勉強は遅い時間までやった。

そして十日後、俺はとうとうこの家を出る事にした。

正直、曹嵩のイジメには耐えられなかったな。（よく十二年も耐えてたわ。あ、歳は十九ね）

皆が寝静まった夜中、俺はこっそりと塀を乗り越えて着地した。

「さて、追っ手が来る前にちゃっちゃんと逃げよ」

一応、旅の商人の恰好はしてるけどな。（それ用の服は買っている）

「……俺を育ててくれてありがとう。じゃあな、俺をイジメた人達よ」

俺は生家に御礼を言い、曹嵩達への言葉を言って夜の闇の中に消えた。

翌日、曹徳が消えた事を知った曹嵩は「育ててやった恩を忘れおつたな曹徳ッ！」と激昂して見つけ次第打ち首にしろと命令をして曹徳の搜索を開始した。

しかし、曹徳は一向に見つかる気配はなかった。

「……曹徳様……」

私は搜索隊を率いる中、思わず溜め息を吐いた。

曹徳様の行方が分からなくなって既に三日が経過していた。

私が初めて曹徳様にお会いになったのは七つの時だった。

姉者は華琳様に付きつきりだったが、私は何故かよく曹徳様と遊んでいた。

しかし、曹徳様が華琳様より普通だと知ると途端に私の両親は曹徳様に近づくと事を禁じた。

皆は曹徳様を普通だと言うが私はそうは思わない。

曹徳様は華琳様とはまた違う逸材だと私は思う。

曹徳様……ご武運を祈ります。

曹徳のために夏侯淵は曹徳の武運を祈った。

「さて、何処に行こかな……」

確か董卓は涼州におったな。

それに董卓軍は俺の嫁（笑）の華雄がおったしな。

「よし、涼州に行くか」

俺は涼州に向かった。



第一話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m

## 第二話

「……やっと涼州に着いたな……」

流石に徒歩で涼州まで行くのはしんどかったなあ。

「とりあえず、宿に入って疲れを癒したいわ」

山賊とか盗賊に出くわして、身体から血の臭いがしてるしな。

「ん？」

何か人だかりがあるな。

「ちょっとすみません」

人だかりの中に入っていくと、董卓軍兵士の募集のおふれが出ていた。(姜族が暴れているため)

「募集は明日の正午までか……」

募集の場所は城か。とりあえず宿で一夜を過ごさせるな。

「宿に行こ」

一夜を過ごしてから募集に応募するか。

路銀が少なくなってきたからな。

その後、宿に入って血の臭いとかを洗い落したりして備えられたベッドに倒れた。

#### 翌日、董卓の居城

「すみません、兵士募集で来たんですけど……」

受付のところでは募集の場所を聞いて行くと、そこは訓練所みたいなところやった。

「む？新しい募集者か？」

訓練所には俺の嫁がおった。

「はい。ところで後ろの人の山は？」

「ん？訓練で鍛えていたところだ」

………はあ。

「私は董卓軍の将の華雄。後ろで酒を飲んでいるのは同じく将の張  
遼だ」

「よろしゅうなあ」

張遼が酒瓶を上にあげる。

「はあ」

「試験は私に一本でも入れたら勝ちだ。これを貸す」

華雄から刃を丸めた剣を渡される。

「あ、ども」

「何か質問はあるか？」

「そつやなあ。俺が勝ったら華雄と張遼は俺の嫁でおK？」

「……………」

あの、黙らないで下さい。

「……………一瞬で片付けてやる……………」

「それは死亡フラグやけど……………」

「黙れエエエーッ！！」

華雄が襲い掛かってくる。

俺は迫り来る金剛爆斧こんごうばくふをギリギリで避けた。

「ほう……よく避けたな」

「そんなヘナチヨコな太刀筋やつたら避けれるわ」

「何だとツ!!」

華雄が振りかぶって、金剛爆斧を振り下ろした。

俺は太刀筋を見て、避ける。

「なツ!？」

「今度はこつちやツ!!虎牙破斬ツ!!」

華雄を下から斬り上げて、威力は弱め肩を叩いた。

ぶつちやけテイルズやな。

せめて何か出来ないかと思って、昔から身体を鍛えながら練習していたんや。

今のところは虎牙破斬と閃空裂破が出来る。

他は修業中やな。

「ぐッ!?!」

華雄が地面に叩きつけられた。

「一本取ったで？」

「……………私の負けだ……………」

……………これで勝ちやな。

「ああ、嫁の件はあんたを挑発するためやからな」

「何ッ!？」

「まあ俺としては嫁でもええんやけどな」

「むむむ……………」

唸るなよ華雄。

「あんさん、中々やるなあ」

「まあ、此処に来るまでに山賊や盗賊と死合いをしてたからな」

「成る程な。兵士としては採用や。多分、兵士というより一部隊をやるかもな」

「え〜」

「何で、嫌そうな顔すんねん」

「だって、部隊長になったら酒とか飲まれへんやん」

「……………あんたは仲間やツ!」

何故か張遼に手を握られた。

「ウチも酒が生き甲斐やのに賣クつちは酒を取り上げるなんで……………」

「そらぁ苦労したな」

「ほんまやで。あ、そついやまだ名前を聞いてなかったな」

……………忘れてた。流石に曹徳はあかんしなぁ……………。

……………そつや。

「性は織田、名は信長や」

まぁこの時代に信長はおらんしええやろ。

「変な名前やな。ウチは張遼や」

「よろしくな張遼」

「あぁ、よろしくな織田」

「……………きゅ〜」

華雄は今だに気絶しているけどまぁええや。

それにしても、華雄に勝てるとはな。

華雄はゲームでも関羽に討たれてるけど、猪突猛進を無くしたら化けると思うねんけどな。

「そつや織田。賈クつちに会わへん？」

「何でや？」

「織田つちやったら一部隊の隊長にいけるからな。酒とか冗談抜きで」

……流石は將軍で事かな？

「いや、普通に路銀を貯めてから旅に行こうかなあと思ってたんやけどな」

「へえ、そうなんか。なら、貯めるまでおっいたらええやんか。客將とかで」

……そんな呑気でええんか？

「ほらほら、ちやつちやと行くで」

「わ、分かったから押すなよ」

俺は張遼に押される感じで賈クの場所に向かった。



第二話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m

### 第三話

「コイツを一部隊長に？却下よ」

「……ほらな」

「何でや賣クつち」

張遼に連れられて賣クの元に来たけど、あえなく却下となった。

「いきなりアタシのところに来たと思えば、ただの一般兵士を一部隊長にしるって……あんたまた酒を飲んでるんじゃないでしょうね？」

「酒は飲んでないわ賣クつちッ！！な、ならウチの部隊に入れてええやる？」

「……それならいいわ」

「流石賣クつちや」

そらあ、張遼の部隊に入れるんなら問題はないからな。

「ほんじゃあな賣クつち。ほら織田も行くで」

「分かった分かった」

俺は引っ張られながら部屋を出た。

「……一体、何なのかしら？」

一人だけになった部屋で賣クはそう呟いた。

「それじゃあウチの副官をやってな」

「仕事は俺に任して、自分は酒を飲むんか？」

「ギクギクッ！！（。。（）」

そら分かるわ。

「で、副官の仕事は何をすんねん？」

「ま、まあウチの補佐役やな。主に書類が多いけどな」

「ならさっさとして酒飲もうや」

「それもそうやな」

こうして、ただの一般兵士の募集に來ただけなのに、何故か張遼の副官をやらされる事になった。

数日後、俺は何となくやけど副官の仕事を覚えてきた。

「まあ張遼がよく逃げ出すのを防いでるけどな。」

「そつや織田つち。明日は戦やで」

「ああ。だからその準備をしてんねん」

明日から、暴れている姜族を鎮めるために出発すんねんな。

「どうや？初出陣の前祝いに飲むか？」

「阿呆か。酔っ払ってたらやられるやるが……」

「ウチは大丈夫やけど……」

「それは張遼だけや」

俺は溜め息を吐いた。

翌日、張遼隊と華雄隊五千名は出発した。

俺には人生初めての大规模な戦いやな。

涼州に来るまでは盗賊や山賊と戦ってきたけど、今回は違つな。

「何や織田つち、緊張しとんのか？」



「ギヤアアアッ!」

兵士が腹を剣で切り裂かれ、腸が露出する。

また、ある兵士は首を斬られて、斬られた箇所から血が噴水のよ  
うに噴き出す。

四肢のどれかを斬られて倒れる兵士や姜族……………。

……………これが……………。

「……………これが戦場なんやな……………」

現代やと銃撃戦とかやけど、これは記憶に残るな。

それでも吐き気はしない。

理由としては、涼州に来るまでに数回、山賊や盗賊達と戦って死  
体を何回も見てるからやな。

しつこい説明やけど気にするな。

「ウオオリヤアアアッ!」

槍を持った姜族の兵士が俺に突撃してくる。

「ハアッ!」

ザシュッ!!

俺は槍を切つて、兵士の首を斬る。

血が噴き出して俺に降り懸かる。

「ウオオリヤアアッ！！」

また来た。

「ウオオオオッ！！」

俺は斬られないように避けて、相手の命を奪っていく。

「ん？」

ふと人だかりを見ると、張遼が姜族の兵士に囲まれていた。

「ちいッ！！」

俺は人だかりに走った。

俺の接近に気づいた姜族の兵士が槍や剣を構えた。

「どけえええッ！！」

俺は叫んで兵士を斬っていく。

「織田つちッ！？」

「無事か張遼ッ！！」

何とか囲みを斬っていくと、切り傷がありながらも孤軍奮闘している張遼がおった。

「ありがとな織田っち。ハアアアアッ!!」

張遼が俺の突撃に怯んだ姜族の兵士達の間隙について切り捨てていく。

「ヒイヒイッ!!」

遂に、姜族の兵士達は囲みを解いて逃げ出していく。

「……助かったで織田っち……」

「無事でよかったわ張遼……」

まあ将軍が死んだら部隊は終わるからな。

………ん?

「張遼ッ!!」

俺は近くの岩に何かが動くのを見つけた瞬間、俺は張遼を抱いた。

「お、織田っちッ!?!」

張遼がいきなりの事で顔を赤くしているが、知らん。

ドストスッ!!



軽い衝撃が来た。

「……華雄ッ！！お前の近くの岩に伏兵やッ！！」

「分かったッ！！」

岩の近くにいた華雄に向かって叫び、華雄は弓を持った伏兵を切り捨てた。

「……これで大丈夫やな……」

「ッ！？織田つち、怪我……」

張遼が俺の背中に打ちつけられた矢を見た。

「医師は何処やアアアアアッ！！」

張遼の叫び声を聞きながら、俺は意識を失った。

第三話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m

## 第四話

「……………う……………」

俺は目を開けると、そこは天幕の中にいた。

「……………知らない天井や……………」

天幕やねんけど、俺自身は俯せのような状態（コナン映画で負傷した阿笠博士みたいな格好）で寝ていたんやな。それとここは天井や。これ重要な。

「……………ん？」

左手が何か掴まれているな。

「……………張遼……………」

張遼が俺の左手を握りながら眠っていた。

「おやおや。目が覚めたようじゃな」

医師が入ってきた。

「ホッホッホ。お熱いのう」

「い、いやこれは……」

張遼から手を離そうにもガツチリと掴まれている。

「張遼將軍はお主の手をずっと握っておったわい。先程まで華雄將軍もいたが戦の後処理をしておる」

「……戦はどうなったんすか？」

「意外にも姜族は強かったが、辛勝と言ったところかのう。死傷者も約三千名を数えておるからしばらく滞在してから帰還するみたいじゃ」

激戦と言ったところやるか。

「……ん……」

あ、張遼が目を覚ました。

「……織田っちッ!」

「うわッ!?!」

張遼が俺が起きてるのを見ると、いきなり抱き着いてきた。

「よかった……ほんまよかったわ織田っち……」

「……どういっ事や?」

俺は思わず医師に助けを求めた。

「お主が当たった矢には毒が塗られていたんじゃないよ」

「……………マジ？」

「本気と書いてマジじゃ」

まさか毒矢とはな……………。

「ほんまに心配してんからな」

よく見ると、張遼の目元に涙の跡があった。

「……………悪いな張遼……………」

「やっと後処理が終わった。織田は目を……………織田ッ!!」

天幕に華雄が入ってきて、起きてる俺に驚く。

「目を覚ましたんだな」

「ああ。大分迷惑をかけたみたいだな」

「全くだ。張遼隊の業務もやらされたんだ」

「それはスマン……………」

「それに貴様が死んだら、また貴様と戦えないからな」

……それが狙いかよ。

「それはちゃんとしたるわ」

「うむ。約束だ」

……何か華雄の死亡フラグが立ったような気が……。

「そろそろ診察したいからいいかの？」

「医師の言葉に張遼が慌てて俺から離れた。」

それから三日間は部隊の休息を兼ねて、付近の村々の治安維持をして帰還した。

それから数日後、俺は董卓軍の兵士を辞めた。

「何で辞めんねん織田っちッ!!」

賈クに辞表を提出して部屋の整理をしていたら張遼と華雄が入り込んだ。

「いやだって……元々軍に入ったんは路銀を貯める事やったからさ。二人かて知ってるやろ」

「そ、そりゃあそつちけど……」

「しかしな……」

何か釈然としない二人。

「大丈夫や。二人に何かあったら直ぐに飛んで帰ってくるな」

「……………」

二人は溜め息を吐いた。

「分かった分かった。んじゃあウチら危なかったら助けにきいや？」

「ああ。そつちや二人に真名を預けるわ」

「……………いいのか？」

「ええよええよ。俺の真名は長門や」

本当は真名を貰われへんかったけど、長門は前世の名前やったからな。

「ウチの真名は霞や」

「私の真名は桜花だ」

え？華雄に真名つてあったんか？

「私が真名を預ける条件は私より強い奴なんだ。一度だけとはいえ、織田……長門は私を倒したんだ。だから真名を預ける」

「そうやったんか……………」。

「ああ。預からせてもらうわ桜花、霞」

「次会ったら飲むで」

「それもええな」

そして、霞と桜花と分かれて涼州を後にした。

「さて、次は何処に行こうかな……………」

巨乳が多い呉に行こうか。確か周瑜は病気があったな。

「あれはどうやって治すか……………」

「ま、今考えて仕方ないな。」

「とりあえず、行き先は呉に決定だな」



「……………はあ……………しんど……………」

俺は今、馬に乗っていた。

流石に馬無しでは足が持たないから途中の町で、馬商人から馬を一頭購入した。

「馬やと楽やわあ……………」

ビュンビュンッ！

ドストスッ！

「ヒビーンッ！？」

「うわッ！？」

な、何やッ！？馬がいきなり暴れだした……………て、尻のところに矢が二本やて？

「ヒビーンッ！！」

「うわッ！？」

俺は投げ出されたけど、咄嗟に受け身をとって傷はなかった。

「へっへっへ……………」

すると、草むらから十数人の山賊か盗賊と思わしき奴らが現れて、俺の周りを囲んだ。

「兄ちゃんよ。有り金と服は置いてってもらおうか？」

「……フッフッフ。だが断るッ!!」

「こらそこ、ジヨジヨとか言っな。」

「なら死んでから奪うまでよッ!!」

盗賊達はそう言っ俺に襲い掛かる。

「お前らが死ぬッ!!閃空裂破ッ!!」

『ギヤアアア……ッ!!』

一斉に襲い掛かるうとしていた盗賊を閃空裂破で倒す。

「な、何だコイツはッ!!」

「お頭を呼んでこいッ!!」

「まだ終わつとらんでッ!!虎牙破斬ッ!!」

「グエッ!!」

俺は虎牙破斬で盗賊を倒し、囲まれたら閃空裂破で脱出する。

「何をやっているッ!!」

その時、正面に大金棒を持った女性が現れた。

……あれって確か……。

「私は魏延、字は文長だッ！！潔く死ねッ！！」

魏延は俺にそう言った。

## 第四話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m

## 第五話（前書き）

若干無理矢理感と歴史改変です。

テイルズキャラは袁術ルートに入ってから出そうと思います。  
勿論ヒロインキャラですね（キリ）・・・（

## 第五話

「私は魏延。字は文長だあざなッ！！潔く死ぬツッ！！」

魏延はそう言って跳躍して鈍碎骨とんさいこつで俺を叩こうとするが俺は避ける。

ドゴオオンッ！！

衝撃で近くあった岩が砕けた。

「次行くぞツッ！！」

「うわツッ！！」

ドゴオオンッ！！

何とか、魏延の攻撃を避けていくけどいずねはやらねそうやな。

……………なら……………。

「突撃やツッ！！」

「フ、潔く死ぬ気になったかツッ！！」

魏延が鈍砕骨を振り下ろそうとする。

「だから死なんわッ！！虎牙破斬ッ！！」

「グウウッ！！」

俺は峰打ちでやる。

「まだまだアッ！！」

俺は連続で虎牙破斬を叩き込んでいく。

「……グフッ！！」

そして遂に魏延が倒れた。

「お、お頭がやられたーッ！！」

「に、逃げるオーッ！！」

生き残っていた盗賊達は一目散に山に逃げていった。

「……はぁ……」

俺は溜め息を吐いて、魏延を背負って近くの小川に連れていった。

「……………」

あ、魏延が目を覚ましたな。

「お？傷はどうや？」

「き、貴様は……………グウウツ！！」

魏延が起き上がろうとするけど、傷の痛みで倒れた。

「無理して起き上がるからや」

俺は魏延の身体に触れる。

「……………や……………あ……………」

ん？魏延が急に顔を真っ赤にしたな。

「……………やめろ……………私の……………肌は……………敏感なんだ……………」

ああ、確かゲームでもそうやったな。

……………でもそれは無視やな。何故なら俺の目の前には魏延のオツパイがあるからな。てかマジパネえ……………。

「……………」

魏延は俺の視線が何処にいつているのに気づいたんか、顔を青ざめながら強く左右に首を振る。……………しかも上目遣いときたよ。





「いいよ。それに……責任取れよ。私にあんなのさせて……」

「あ、ああ……」

いやあ、魏延のオツパイは柔らかかったからなあ。

とまあ、魏延を仲間？にする事が出来た。

「それでこれから何処に行くんだ？」

「今のところは孫呉でも見に行こうかなと思ってるわ」

「ほう孫呉か……」

確か孫堅が黄祖に討たれるからな。

それを阻止してみるか。

「んじや、孫呉へ出発やな」

というわけで孫呉の長沙に着いたわけなんやけど……。

「兵士として参加するの？」

「いや、軍団の後ろに隠れながら付いていくわ」

「何でだ？」

「……どう説明しよか………そうや。」

「いや実はな、焰耶（真名は許してくれた）と出会う前に管輅とかいう占い師に言われたんや。『孫堅を守らねば貴様はまともな人生を歩めない』てな」

「……嘘っぱいな………」

「俺も最初はそう思ったで。でも管輅は雷や雨で増水した川が氾濫する事を予言して見事に当てたからな。んで俺は信じてみる事にしたんや」

「成る程なあ………」

俺と焰耶は長沙の町並みを歩く。

「とりあえず、宿を取って孫堅軍が動くまで待つしかないな」

それから三日後、孫堅軍が襄陽へ向かったのを聞いて俺と焰耶は孫堅軍を追った。

「…………あれが襄陽やな……………」

「それであれが孫堅軍と……………」

俺と焰耶は近くの林で隠れていた。

「今のところは何もないな」

「ん？おい、襄陽の門が開いたぞ」

確かに門が開いていた。

「孫堅軍に行くぞ」

「分かった」

俺と焰耶は孫堅軍の陣営に向かった。

第五話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( m

## 第六話（前書き）

今回はご都合が出ます。

マイソロシリーズでアイテムを取る箱……。

## 第六話

「……………なんだかなあ……………」

「どうしたんだ長門？」

不審に思った俺に焰耶が声をかけてくる。

「あの箱の中身を見てから急に態度が怪しいぞ」

「いや大丈夫やねん」

「ならいいが……………」

実は、孫堅軍を追っている最中にとある箱を見つけたんやな。

その箱がなあ……………ティルズのマイソロシリーズに出てくる道具箱にそっくりやってんなあ。

んで、箱を開けたら一冊の本があった。

本の中身はファーストエイドやリカバーなどの呪文の仕方が書いてあってんな。

何で恋姫の世界にティルズのがあったのかは不明やけどな。

「ん？」

何か孫堅軍が騒がしいな。

あ、単騎で誰かが山の方に向かったな。

「多分、あれは孫堅やろな」

「……普通、大将は単騎で飛び出すか？」

まあ孫策の親やからな。

「とにかく追うで」

「ああ」

俺と焰耶は孫堅を追った。

「ちいッ！！畏だったわねッ！！」

私はそう叫びながら黄祖の伏兵を斬り倒していく。

「もらったッ！！」

「なッ！？」



伏兵に隠れていた黄祖が私に斬り掛かる。

咄嗟に私は左腕で頭を庇う。

ザシユツ!!

「グアアツ!!」

……痛い……眼を開けると、私の左腕は斬られていて地面に落ちていた。

「ゲヒヤヒヤヒヤツ!!これで終わりだな孫堅ツ!!死ねえツ!!」

黄祖が私に斬り掛かろうとした。

「そうはさせるかよツ!!」

ザシユツ!!

「ゲバアツ!!」

その時、黄祖の首が吹き飛んだ。

「間に合ったか」

まだ死んでいなかった孫堅を見て安堵する。

「焔耶ッ！！思いつきり暴れるッ！！」

「初めからそのつもりだッ！！」

焔耶が伏兵を散らしていく。

「大丈夫か孫堅？」

「あ、ああ。お前達は？」

「なに、ただの旅人や」

俺は切断された左腕に包帯を巻く。

「ウツ！！」

「少し我慢してな……ファーストエイド」

切断された左腕（肘）にファーストエイドをかけて血を止める。

「血が……」

「大丈夫や。左腕を斬られた以外はな」

「……………それは仕方ない。戦場での傷なんだ」

孫堅が笑う。

てかほんまに孫策を大人にしたバージョンやな。

「堅殿オーーツ!!」

「祭の声だ……」

さて、そろそろずらかるか。

「焰耶。そっちは？」

「あらかた片付けたぞ」

「了解。それじゃあな孫堅」

俺と焰耶は馬に乗る。

「あ、待てツ!!お前の名前は何だ？」

「姓は織田。名は信長や」

「織田。助けに来てありがとう」

孫堅は俺に頭を下げた。

「なに、気にするな。んじゃあな」

俺と焰耶はそのまま立ち去った。

「堅殿ツ!!無事であったか……と、それは……」

「祭、済まなかったな。左腕を黄祖に取られた」

「いや、堅殿が生きているだけでもよかった」

「……………織田……………」

私は二人が立ち去った後を見ながら祭達と陣営に戻った。

「さあて、次は何処に行こか」

「私は何処でもいいぞ」

馬に乗りながら考える。

……………ん？確か……………。

「確か南陽大守は袁術やったな？」

「ああそうだぞ」

「なら南陽に行って、袁術の元で客将でもするか」

「何故だ？」

「ん？だって袁家やと給金は高いやろ？」

「……納得した……」

焰耶は苦笑した。

そして俺達は南陽へ向かった。

「あれが南陽やな」

あれから一週間の時が流れたけど、何とか路銀が底をつく前に到着出来たな。

……ん？

「何やあれは？」

「どれだ？」

俺達から五百メートル程離れたところに百名程度の軍勢と少女と女性がいた。

「うっん……あれはッ!？」

「お、おい長門ッ!?!」

俺は少女と女性を漸く思い出して馬を軍勢に走らせた。

?? SIDE

……これは失敗しましたね。まさか文官の韓胤までもが裏切つてたなんて……。こんな事になるなら素直に零さんの言うことを聞いとけばよかったですね。

「さあどうしますか張勳殿？我等に従うと宣言すれば愛しい袁術様を返しますよ。くつくつく……」

武将の雷薄が私に尋ねてくる。

「……………」

「おやおやだんまりですか？なら、袁術様は少し痛い目に会わないといけないですね」

ニヤニヤしながら同じく武将の楊奉が美羽様に突き付けている剣を喉元に突き付ける。

少し刃が喉に当たったのか血がツウッと流れ出ている。

「な、七乃お……………」

「御嬢様ッ！！」

くッ……やはりここは従うしかないですね。

私はそう思い、構えていた剣を地面に突き刺そうとした時、御嬢様に剣を突き付けていた楊奉の首が飛んだ。

そしていつの間にか妙な刀剣を持った私くらいの歳の男がいた。

張勳SIDE終了

第六話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m



## 第七話（前書き）

総合評価が三日で606ポイント……。マジでありがとつこぞいま  
すm( ) m

今回は（仮）でもあった美羽と七乃との出会いです。美羽が馬鹿じ  
やないので。

第一話は改訂しました。

## 第七話

### 長門SIDE

おゝ、やっぱり首って人体の中で一番弱いてほんまやねんな。

まあそれは置いて。

……やっぱり少女と女性は袁術と張勳やったか。

張勳は好きなキャラやから感動もんやわ。

「き、貴様何者だツ?!」

ちい、人が感動してんのにうぜってえ奴らやな。

「おめえらに名乗ったて意味ねーやろ。どーせ今から死ぬんやしな」

そついうと俺は袁術を抱え、張勳の元に行く。

「御嬢様ツ!!」

「七乃おゝ、恐かったのじゃ」

二人が抱きしめあう。

「フン。どうやら貴様はこの場を見ていないのか？」

文官っぽい男が右腕を上げると三十くらいの兵が俺に槍を向ける。

「どおううりやあああー！ツ！！！」

そこへ焰耶が軍勢の後ろから攻撃を仕掛ける。

「な、何だツ！？」

「後方からまた単騎での攻撃ですツ！！」

「な、何イツ！？」

「おいこら、よそ見すんなよツ！！」

「なツ！？」

一瞬の隙をついて、文官の首を狩った。

「焰耶ツ！！残りは兵士だけやツ！！叩き潰せツ！！」

「おうツ！！」

そして、少女と女性が見守る中、百名程度の軍勢は壊滅状態になる。

そこへ、南陽から砂埃と共に新たな軍勢が来た。

「あ、零じゃッ！ー！」

袁術が『紀』と書かれた牙門旗を見てはしゃいでいる。

「『紀』？……………ああ紀霊か」

「ー！ーッ！？何故紀霊さんを知っているんですかッ！？」

七乃がつかみ掛かるように俺に問う。

「まあ三国志を見たからな」

「三国志？」

「後で教えるわ」

「美羽様ッ！！七乃ッ！！無事かッ！！」

現れた部隊から一人の女性が叫びながらこちらに来た。

「おおッ！！二人とも無事であったか。……………ん？お主らは誰だ？」

黄蓋のようなボンキュボンのお姉さんが話し掛けてくる。

「零、この二人は妾達を救った命の恩人じゃ」

「おおそうでしたか。僕は紀霊。美羽殿に仕えておる」

「俺は姓は織田。名は信長です」

「そうじゃ。妾達も名乗ってはおらんかったのう。妾は袁術、真名は美羽じゃ。南陽大守をしておる」

「お、お嬢様ッ！？真名も言つのですかッ！！」

張勳が驚いてる。

「何を言つのじゃ七乃。織田は妾達を助けてくれた。それに何やら織田は面白そうじゃからのう」

「お、お嬢様」

……………袁術てこんな性格やったけ？

「それなら俺も真名は長門や」

「私は魏延。真名は焰耶だ」

「おおそうか。ほら七乃も言つのじゃ」

「……………お嬢様がそこまで言つのであれば。私は張勳、真名は七乃です」

「ところで長門と焰耶。何故南陽に？」

「ん？いやあ、そろそろ路銀も底を尽きそうやったから美羽の元で客将でもしよつかと思つてたんや」

「成る程のう。ならやってもいいが、その代わりに条件があるのじや」

「条件？」

「うむ。まあその事は城に戻って言うのじや」

「先程は真名を言えなかったな。僕の真名は零じや。受けとってくれ」

「ありがとな零。俺は長門だ」

「こちらこそ。私は焰耶だ」

「さて、真名の交換も終わったところで条件をなんじやが……妾達と鼠退治をしてほしいのじや」

「鼠退治やて？」

「お、お嬢様。まさか……」

「そのまさかじや。妾は今が好機とみておる」

「……どついつ事や？」

俺は七乃に尋ねる。

「あ、はい。御覧の通り、お嬢様はまだ幼少のため政治の全てを理解しきれません。そこへ自分の腹を満たす事しか考えてない文官の韓胤や武将の雷薄達がお嬢様を人質にして我々を脅しているのです」

昔も今と変わらんなあ……。

「分かった。そういう鼠退治なら任せろや」

七乃は俺の言葉に涙を流した。

「ありがとうございます長門さん……」

「てかさ、美羽に忠誠を誓ってるのは七乃と零だけなん？」

「……残念じゃが、俺と七乃以外は美羽様を暗殺するような輩だけじゃ」

零が俺に詳しく話す。

「そうか……。ならば七乃、一か八かの賭けをしてみいひんか？」

「どんなの賭けですか？」

俺は七乃に耳打ちをする。

「……まさに一か八かですね。ですがやってみる価値はありますね。」

やってみましようツ！！」

七乃は零と美羽に詳しく説明する。

二人も意気揚々として準備に取り掛かった。

「てか展開早くね？」

それを言うな。by 作者

翌日、李豊、楊弘以外の文官、武官が緊急召集された。

内容は『袁術が病で倒れた。もって後、数日の命。袁術は後継者を定める』と使者が伝え、自分の腹を満たす事しか考えない武官や文官達はウキウキしながら集まった。

だが、それが彼等の命取りとなった。



第七話（後書き）

御意見や御感想等お待ちしております m ( ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2622z/>

---

曹徳の奮闘記

2011年12月11日13時28分発行